

「花の回廊」へようこそ (1)

2022. 05. 09

1 花の半島に住んで

①命が^{はな}華やぐ初夏がやってきた。伊豆半島は花の半島である。

アトリエは西に天城の連山を望み、南に大島を眺望できる。ここは高台で、数キロ先の海辺まで樹海が広がる。

マグノリア、カルミア、つわぶきなど、四季を通じて純白、深紅、黄金の色鮮やかな花が咲き乱れる。

②今年は花も鮮やかで、木々の緑も美しい。本当に、数年ぶりのことである。

3メートルを超えるシャクナゲは、真紅で大ぶりの花をつけたし、藤の花はテラスに巻きつき淡い紫色の花房が垂れ下がる。

^{ひめしやら}姫沙羅は5月の空に枝を広げ、コナラやクヌギも今年は一段と葉色も鮮やかで葉づきもよい。最近では居間から見る光景も、緑一色である。

③高原にアトリエを構えたのは二昔前になる。

この辺りは黒潮の流れが近く、空気は澄み渡る。海の光と山の光が交錯して、光の粒子が燦々と弾ける。一陣の風が吹くと、光は揺らぎ、花の色調も変わる。

④週末を何度かアトリエで過ごすうち、妻が「光が花と踊っている。花と光が音楽を奏でている」という。「どんな音楽？」と聞くと、「ドビッシーの『月の光』を聞いているみたい」という。

不思議なことに、彼女は花と対話し、光と戯れ、自然と交響しているのだった。

小さい時はピアニストを目指したと聞いていたが、わたしとは全く違った感覚の持ち主だった。結婚後30年近くたって、はじめてそうと知った。

⑤やがて彼女は花の写真を撮り始めた。毎朝、近くの野原や雑木林や丘陵に出かけて、2時間近く飽きずに花の写真を撮っていた。それを友人・知人に季節の挨拶として送った。

はじめは「いつまで続くのか」と冷やかされ半分だったが、しばらくして、彼女の作品特有の優しさ、繊細さ、それに独自の空間把握に気がついて、本格的に応援する気になった。

⑥「50 の手習い」で、彼女は色彩理論の資格を取り、プロの写真家に学んで本格的に花の写真を撮り始めた。10 年近くの研鑽を重ねた後、日本と欧州で個展を開くようになり、妻（秋津マキ子）の第二の人生が始まった。

⑦写真を撮っていると、見知らぬ農家のご老人が、畑のアリウム・ギガンチウムのをバサリと切って、「持って行け」という。花友（このあたりでは「ハナトモ」と呼ぶ）からは、玉ねぎや大根をもらうなど、実利も多い！

プロ用の大型カメラと三脚を持って、雑木林や野辺を探索する秋津の姿は、もはやこの辺りの「風物詩」である。

2 心境が変われば見方も変わる

① 彼女の独特な空間認識を象徴する一連の作品がある。

下記のタカサゴユリ（高砂百合）は、今から 10 年ほど前に撮った。花言葉は純潔、飾らぬ美である。



②その当時わたしは、確かにいいと思ったものの、あまりにもシンプルな作品なので、つい見過ごした。

中央に純白の百合を浮き立たせ、背景は黒一色。白と黒の対比は、受け手に 1 種の緊張感を

覚えさせる。あまりに単純でそぎ落とした作品は、見る者にある種の覚悟を迫る。
それがわたしにはちょっとしんどかった。

③数年前パリで個展を開いたとき、来場者の中にシニアのギリシャ美術研究家（日本人）がおられた。

その女性から「どの作品にも禅の影響が感じられる。草木国土悉皆成仏^{そうもくこくとしつがいじょうぶつ}の自然観が表れている」といわれて、秋津は驚いたらしい。自分ではそんなつもりは全くなかったからである。

④そういえば、秋津は以前から「写真を撮るときは、花を観察するのではなく、花と一体になる」といていた。

これは禅の観想という技法に通ずる見方だが、わたしはあまり気にしていなかった。まさか彼女の作品が日本的自然観を反映しているとは、考えもしなかった。

⑤しかし、齢を重ねて心境も深まり（?）、「和の美」に強くひかれるようになって、以前は気づかなかったこの作品のよさを改めて知った。百合が、命のエネルギーを放散する気配を感じる。その凜とした美しさに、心を洗われるようになった。
最近では、これこそ「究極の美」だと感じ始めている。

⑥こんな風に、同じ作品でも受け手の美意識や心境の変化によって、評価は変わる。
その時その時に、自分がよいと思うのであれば、それが自分にとって最高の作品である。

3 微睡^{まどろ}むマгноリア

①アトリエから坂を下っていくと、林を切り開いた千坪ほどの庭がある。庭というより、自然観察園と呼ぶほうが正確だろう。オーナーの方とは、花の写真を通しての長い間のお付き合いで、出入り自由にさせてもらっている。
何よりもうれしいのは、四季を通じてさまざまな花木が咲き乱れ、絶好の被写体が多いことである。

②特に、春先から初夏にかけて咲く白、薄紫、ピンクなどのマгноリア（木蓮）が素晴らしい。

マグノリアは、モクレン科の花木の総称で、白木蓮(ハクモクレン)、コブシ、泰山木(タイサンボク)、ホオノキ、オガタマなど多種多様で、大きいものは5メートル位。

その花は淡い濃いものまで、どれも素敵な芳香を放つ。

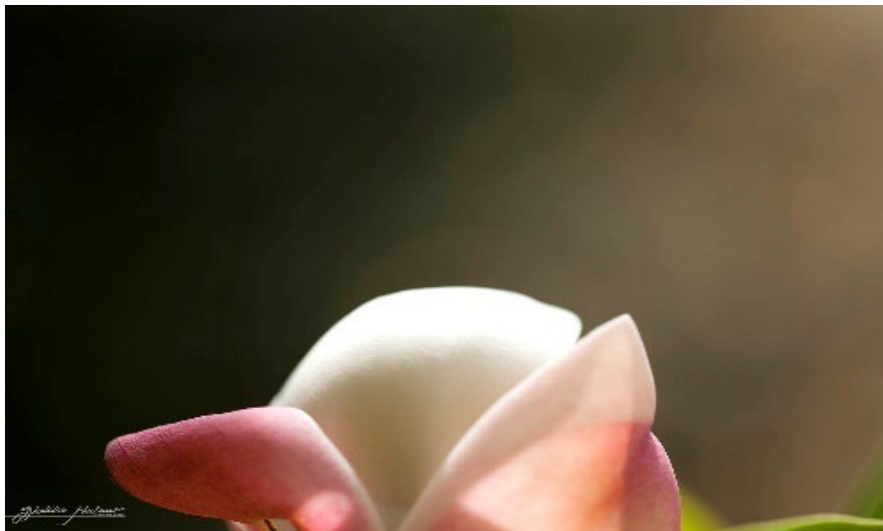
撮影中は、ミソサザイ、ウグイス、シジュウカラなど小鳥の鳴き声も楽しめる。

③ただし、この辺の撮影には危険も伴う。マムシ、スズメバチ、チャドクガなどが多いので、夏でも長袖は勿論だし、場所によっては長靴も必須である。

近くには、猪、ハクビシン、猿もやってくるから油断がならない。

④秋津の作品には、高砂百合とは違い、ほのぼのとした、快適さ、穏やかな気持ちにさせる一連の作品群がある。

この庭で写した作品は、何度か個展に出品した。以下の「^{まどろ}微睡むマグノリア」はその一例である。



⑤個展を取材に来た女性アナウンサーが、インタビューしている。

優しいぬくもりを感じる写真ですね。

お母さんが、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた時の感動がよみがえります。

でもこれは何の花かしら？

⑥秋津が答えている。

これは ^{おおやま れんげ}大山 蓮華 といい、花言葉は「変わらぬ愛」です。
木蓮の一種で、高さは3メートルほど。春先に白い花が咲きます。
優しい光になるように、逆光ではなく順光で撮りました。

⑦刷り上がった時から、わたしはこの作品が大好きだった。

朝光が右斜め上から左下にかけて対角線状に差し込み、花びらを浮き立たせる。

花卉の産毛は ^{みずみず}瑞々しい桃を思わせる。

背景はビロードを思わせる柔らかな色調で、^{あずきいろ}小豆 色 から ^{さくらねずみ}桜 鼠 へとグラデーションをなして広がる。赤ちゃん蓮華が、眠りから覚めきらず、朝の淡い光にまどろんでいる様子が感じられる。

実際、長い間部屋に飾っても見飽きることがない。わたしと極めて相性のよい作品である。

⑧だが、一見地味な感じなので、秋津は作品のよさに気がつかなかった。

始めは個展に出すつもりはなかったが、わたしが何度も勧めるので出品することになった。
出品してみるとやはり好評だった。

デザイン学校の学生らしい学生3名が、作品の前で30分～40分も光のとり方について議論していた。

⑨あるシニアの女性は、作品の前で40分近く立ちどまり、花と対話をしている風だった。

彼女の態度から、作品に感情移入している様子が感じられた。

おそらく、この「おだやかな時間」と「心地よい空間」を楽しんでいるのではなかったか。作品は、もう作者から独立した存在となっている。

⑩この作品には「^{まどろ}微睡 むマグノリア」とタイトルをつけて、朝日に当たってウトウトして

いる花のイメージに重ねたが、海外ではタイトルはいらないという観客は多い。

自分がどう感じるのかが大切なので、余計な言葉（タイトル）があると、作品を純粹に楽しむ邪魔になるという。日本の観客とは違い、それくらい自分の好みを優先する。

4 相性のよい作品の選び方

①たしか、旧テートギャラリー（ロンドン）の館長が面白い話をしていた。
絵画を買い入れるときは、直感的に作品の良し悪しを判断するのではなく、時間をかけて購入するかどうかを決める。理想的にはお目当ての絵画を借り入れて、3ヶ月ほど見続けるとよいという。

②プロでさえ、最初の印象は当てにならないらしい。どうしても、コントラストが強かったり、切れ味がよかったり、人目を引く作品に目を惑わされる。
しかし、身近で見続けると印象が変わる。人目を驚かす作品はやがて飽きてしまう。長い間見続けても飽きない作品こそ、時代を超えて愛される作品である。

③今では圧倒的な人気があるビンセント・ゴッホの絵も、当時の美的感覚に合わず、生前に売れたのはわずかに「赤い葡萄畑」一枚だった（諸説あり）。こんな例がアートの世界では不断に見られる。作家の世評も学歴もキャリアも、作品の出来栄とは一切関係がない。

④「マネジメントの父」と呼ばれたピーター・ドラッカー(1909年-2005年)は、自分の好みをはっきりしていた。

彼の20代始めのころの話。ロンドンで銀行員だったドラッカーは、帰途にわか雨にあった。たまたま雨宿りに入った展覧会場で日本美術に出会い、たちまち「恋に落ちてしまった」。

彼は水墨画、文人画、禅画などの日本画を蒐集し、特に花鳥画や動物画を好んだ。

世間の評判とは関係なく「生活を豊かにし、生活の一部とすることができるかどうか」を基準に日本画を集めた。

身近に飾って長く楽しむことができるかどうか。これが唯一の基準だった。画商の評価や作品の投資価値には興味がなかった。

⑤後年、彼は驚くべき人生哲学を語った。

わたしは、正気を取り戻し、世界への視野を正すために日本画を見る。

「日本画を見て正気を取り戻す」とはどういう意味だろうか？

ビジネス一辺倒の生活をしていると、心が枯れて正常な判断を失う、という意味だろうか？

⑥本来、アートは自由であり、多様である。どれがよい絵画だとか音楽だとかは誰にも決められない。究極には好みの問題である。好き嫌いに客観的基準はない。
アートは、功利主義・効率主義を優先するビジネスとは対極にある。正解もなければ勝者もない。